編集後記

『比較文明研究』第十六号をお届けいたします。本号には、論文六本（内、仏文論文一本）、追悼エッセー一本、書評一本を収録することができました。

＊

安田喜憲客員教授の「梅棹忠夫先生を偲ぶ」は、『文明の生態史観』で「こよなく愛されたモンゴルの風土を、なぜ梅棹先生は「悪魔と暴力の巣」と呼んだのか」という疑問を手がかりに、安田教授自身の研究の中からこの答を見出す過程を述べながら、「畑作牧畜文明」と「稲作漁撈文明」の特徴を対比的に明らかにしていく。その対比の観点から、梅棹学の原点にある山の意義や、梅棹忠夫という天才的巨人の人間性が明らかにされている。安田教授の敬愛の念溢れる素晴らしい学術的追悼エッセーである。

川窪啓資客員教授の「西欧のモラル・サイエンスの系譜から見たモラロジーの破天荒性」は、英米のモラル・サイエンスの代表的著作を精読し、当時の科学の未発達によりサイエンスとしての面が不十分であることを突き止めた上で、廣池千九郎は「新基軸のモラル・サイエンス」をつくり「モラロジー」と名づけたことの理由を解明している。次に、モラロジーを体系化した『道徳科学の論文』を取り上げ、その構成を、第一から十一章までと、第十二から十五章までに分け、前者は西欧のモラル・サイエンスの現代版であり、後者は最高道徳論であると特徴づけている。聖人研究による最高道徳の世界の解明と、最高道徳の原理・実質・内容の探究において、「モラロジーの破天荒性」を明らかにした後、未来に向けたモラロジーと最高道徳の文明論的意義を提示している。本論文は、川窪教授の英文学研究と比較文明学研究の成果を踏まえて、モラロジーの破天荒性を明らかにしようとした優れた論文である。

染谷臣道客員教授の「「隠された基壇」から見たボロブドゥール」は、何のためにボロブドゥールが建立されたのかを、現在では見ることができないため、これまでほとんど言及されることのなかった「隠された基壇」のレリーフ一六〇枚の写真を手がかりに考察した論考である。罪、施し、説法、地獄、天界を描いたレリーフの解説は大変興味深い。レリーフのなかには刻字が残されたものがある。染谷教授は「丁寧に話す」という刻字に注目し、その言語的、歴史的、文化的意味を論じながら、今日に至るジャワ文化の特徴を描き出す。そして「隠された基壇」に込められた意図は、善因善果悪因悪果を説くことに加えて、「物品であれ、言葉であれ、他者に施すことの大事さを人々に伝えたいという願い」にあったと捉えている。最後にボロブドゥールとプランバーナンの比較が行なわれ、ボロブドゥールの限界を指摘し、さらにボロブドゥールに込められた不殺生の価値を失った現

代ジャワと人類社会の状況を、比較文明学の視点から批判的に吟味している。本論文の基礎的部分を構成しているレリーフ解釈には、染谷教授が長年手がけてこられた、インドネシアをフィールドとする文化人類学の知識が傾注されており、そこで明らかにされた限界を比較文明学的観点から人類的問題として提起している。読者を深い文明的問題に目覚めさせてくれる優れた論文である。

小林道憲客員教授による「芸術・祝祭・文明」は、「日本の芸能」で、能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎の宗教的起源、この世とあの世、そして死者の霊の救いなどのテーマが提示される。次に「芸術と祝祭と文明」では、祝祭と芸能から演劇、芸術の成立過程が描かれ、偉大な芸術作品には、日本でも、また古代エジプト、メソポタミア、ギリシアでも、宇宙論的コスモロジーがあって、それが人間の心のカタルシスを可能にしてきたことが語られる。さらに、宗教、都市共同体、文明の成立が、祝祭、芸術、財の集中と蕩尽といった観点から吟味されていく。「現代と芸術」では、芸術作品が置かれる空間が問題にされる。美術館、博物館、展覧会場に置かれた現代の芸術作品は、それを生かすより大きな世界が失われていること、また、複製技術で処理されインターネットで手軽に見ることができる芸術作品からはオーラが消えてしまったと指摘し、「世界を失った芸術は、単なるパフォーマンスや実験にすぎないものとなるであろう」と結んでいる。本論文は、現代世界で進行しつつある無意味化や意味喪失といった現代文明が内包する最も深刻な問題に対し、芸術や祝祭の観点からそのような事態が発生する根源的理由を明らかにした、優れた論文である。

安田喜憲客員教授による「文明の精神」では、「文明の原理」を構成するソフトウエアとしての「文明の精神」を探求し、人類の繁栄に役立たせることが、比較文明研究の最終目的である、と目的が明確に提示されている。「文明の原理」を構成するソフトウエアを「文化」ととらえ、「文明の原理」を構成するハードウエア（「制度・組織・装置系」）を「文明」と捉える先人の議論を批判し、両者を一体と捉える議論を構築していく。「文明の精神」は「文明の風土」と密接不可分であり、文明も人間も風土の産物であると論じ、「新たな文明原理を構築するうえにおいて、ぜひとも必要なことは、文明の精神性と風土性を追加することなのである」という。現代世界を概観し、市場原理主義と金融資本主義が牽引する近代ヨーロッパ発の物質エネルギー文明の文明原理に変わる「新たな文明精神に立脚した文明原理を創造し、文明を再定義」して、「新たな生命文明の時代を創造しなければならない」としている。安田教授の文明の定義は、「地球固有の風土に適応し、人間独自の自立的エネルギーシステムを持った、普遍的・持続的な文明原理が確立した時をもって、文明の誕生とみなす」というものであり、都市革命ではなく農業革命の成立をもって文明の誕生とする可能性を拓いている。この定義により、「縄文は文明である」だけでなく、「二一世紀の地球と人類の危機を救済できる文明原理」

となりうる、と主張する。さらに安田教授は、稲作漁撈型の「農村文明」という概念を提唱し、畑作農耕型の「都市文明」と比較し、後者はハードウエアに優れ、前者はソフトウエアに優れていたと指摘する。今、人類は、高い精神に立脚した文明原理を創造し、それに立脚した生命文明の時代を構築していく必要がある、と明確に主張する。本論文は、先人の説を踏まえながら、それらを批判的に乗り越え、新たな文明の構図を展開しようとする、大きなスケールを持つ優れた論文である。

松本亜沙子客員教授の「明治の西洋動物学の黎明――木下熊雄」は、サンゴ研究において、欧米で「現在も最も論文を参照・引用され、知られている日本人」であるにもかかわらず、「日本での知名度は非常に低い」木下熊雄（明治一四年［一八八一］―昭和二二年［一九四七］）を取り上げた伝記的研究である。木下と研究領域が重なる松本教授は、木下の経歴、採集調査地とその調査業績、また、居住地であった熊本県三角、「四〇代半ばで学問をやめ」て移り住んだ香川県丸亀、太平洋戦争開戦後に再び熊本伊倉などの地誌的文化的背景等を丹念に調査し報告している。さらに、木下熊雄を取り巻く、伊倉木下家、菊池木下家の「錚々たる人材」を描き出した上で、木下熊雄の人物像をエピソードを織り交ぜ生き生きと描き上げている。本稿は、海洋生態学の研究者が、専門的観点から「生活と文化に関係して科学を説明」しようと試みた優れた論文である。

服部英二客員教授の“La Métamorphose du Jardin d'Eden: Le voyage de 'Chahar bagh' de Babylone à Versailles”は、「エデンの園の変貌――バビロンからヴェルサイユに至るチャハル・バーグの旅――」と題して『比較文明研究』第十四号（二〇〇九）に発表された論文の改訂仏訳論文である。タージ・マハールの庭とヴェルサイユ宮殿の庭にある十字形の水路という基本的な形の一致に、服部教授が疑問を抱くところからはじまる。すぐに、「エデンの園」、そこから流れ出す「四つの川」が「チャハル・バーグの庭園を作り出したはず」と洞察され、「この楽園の思想はイスラームに引き継がれ」、「イベリア半島に入［り］」、カトリックの「修道院建築」の中に取り込まれていったことが、文明移転のプロセスの中で確証されている。次に、フランス庭園の誕生物語、そしてヴェルサイユの完成が興味深く語られたあと、その庭園にチャハル・バーグを見出した服部教授は、この庭を造ったル・ノートルはどこでチャハル・バーグの情報を得られたのだろうか、と問う。そして、それはアンダルシアでもルネサンス・イタリアの庭でもなく、ムガール帝国の庭園だと推察する。ではどのようにして、ル・ノートルはそのような情報に接しえたのであろうか。服部教授は、「二〇〇七年、私はユネスコのある会議の折、この東方からの情報の荷い手というミッシングリンクにふさわしい人物に行き当たることになる」として、タヴェルニエという人物を見出してくる。彼は、ルイ十四世に直接拝謁できる立場にいたこと、当時王室付きの

庭園設計士であったル・ノートルと直接接触する可能性があったことを摑んだ後、それを論証し、文明の影響関係を明らかにしていく。本稿は、オリジナルな発見と論証に基づき、フランス庭園の誕生を比較文明学的に謎解きした、大変優れた論文である。

斉藤之誉研究員の書評、「松本健一著『海岸線の歴史』ミシマ社、二〇〇九年」は、「地位層」と「時代相」というキーワードを手がかりに、地理学の専門家が地理学的方法論への関心から『海岸線の歴史』にアプローチすることによって、その意義と教育的価値を明らかにした優れた書評である。

＊

多くの方々のご協力を得て、今回も充実した研究成果を収録することが出来ました。ご多忙の中、玉稿をご執筆賜りました先生方、また、本誌完成にご尽力いただきました行人社野澤幸弘社長に、篤く御礼申上げます。

（立木教夫）